

### 「データ蘇生学」入門

矢野 眞 和 (桜美林大学大学院・大学アドミニストレーション研究科教授)

KJ法の創始者である川喜田二郎先生が、一昨年にお亡くなりになられた。入学したばかりの折に、文化人類学の講義を拝聴し、大学には面白い先生がいるものだと思いきや、心地よく驚いた。名著『パーティー学』(社会思想社)が出版された1964年のことである。この本では、「野外で集められた種々雑多なデータから、何が発見され、くみだてられるか、という創造の技術」を「くみだての工学」と表現し、文中では「紙クレ法」という言葉で説明されている。私は今でも「くみだて工学」という言葉が大好きで、愛用している。

技術者として自動車会社に就職した私だが、学生時代に遊びすぎた反動もあって、学び直したいと思うようになった。大学に戻ってみると、紛糾のさなか。そんなキャンパスに、大学を創造の場にすべきだと静かに語るKJの姿があった。問題解決の実践を提唱してきたKJは、具体的な解決にいたらない現実で落胆して、1970年に大学を辞職。そして、山や湖畔や村にテントを張り、フィールドワークをしながらKJ法を学ぶユニークな実験大学(「移動大学」)を起業した。

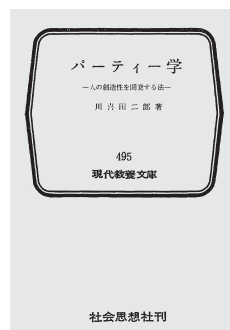
移動大学の発起人の末席に加えていただき、2週間のテント教室に3度ほど参加したが、コンピューターが使えるという理由によって採用された助手だったから、こちらが私の本職。社会システム分析に多変量解析を導入する研究が注目されはじめた頃のこと、多変量解析のプログラムをつくりながら、膨大な調査統計データと戯れていた。数理をプログラム化しながら、文化人類学者であれ、統計学者であれ、偉い人は共通した本質を鋭くつくものと思った。

似ている言葉をグルーピングして、くみだてて、その背後にある何ものかの言葉をつくる。そして、グループの間の関係を構造化する。このKJ法のプロセスは、変数の距離や相関を指標にして、似たもの同士をくみだてたり、その背後にある力を読み解いたりする統計数理に共通した発想だ。

KJ法で描かれる因果・相互依存・対立の関係構造は、回帰分析・因子分析・判別関数と同型だ。言葉と数字の自由交通、つまり言葉をくみだてながら数字を構想し(これが社会調査票のデザイン)、数字をくみだてながら言葉をつくる(これが解釈)ところが面白い。

言葉であれ、数字であれ、データは命を失った死骸の断片だ。死んだデータをいかに蘇生させるか。それがくみだてて工学の生命線だと思う。データをくみだてていくと、死んだデータが生きてくる。数字に耳を傾けていると、「回帰分析してほしい」「因子分析してほしい」と語ってくれる。そんな声を聞かずに、外在的な統計手法でデータを「処理」してしまっただけでは、データが可哀そうだ。データ処理学ではなく、データ蘇生学でなければならぬ。言葉から先に入るか、数字から先に入るか。それは対象とする問題の性質による。社会調査を学ぶ学生たちに、そんな心構えを伝えたいと願ってきたが、蘇生学の入口をさまよっている私にまだそんな力量はない。

「既成概念に囚われるな」「己を空しくせよ」「相手の身になって考えよ」「データをして語らしめよ」「360度まわって考えよ」「アマチュアでプロの仕事をしろ」「ある時は政治学者、ある時は経済学者、ある時は社会学者、ある時は――、にならなければならない」。そんな大切な言葉をテント教室で教わったが、未だに未消化である。亡くなられる数年前にお会いした最後の会話が忘れられない。世間話を切り出したなら、「矢野くん、学問の話をしよう!」とたしなめられた。そう、学問をしよう。老而学、則死而不朽。



## 生駒宗教調査の80年

塩原 勉 (大阪大学名誉教授)

1980年、出入り自由なネットワーク型の研究グループ「宗教社会学の会」が創られた。宗教社会学ではなく宗教現象そのものに関心をもつ者の集まりである。大学院生を含め、30代の若いメンバーが主力だった。なぜ宗教現象なのか。その当時、「宗教回帰」「宗教ブーム」「新新宗教」といった言葉が拡がりつつあり、時代の転換の予兆として宗教現象に動きが出てきているのではないか、という感覚と認識をメンバーはもっていた。

生駒山系は大阪、奈良、京都の府県境にまたがる高さ数百メートル、南北35キロ、東西10キロの山系で、大阪市中から電車30分で山麓に着く。古くから除災招福の民間信仰と民俗宗教の宝庫として知られてきた大都市近郊の宗教的エリアである。1981年4月に、会のメンバーははじめて生駒山系を踏査した。そこで目撃したものは、まぎれもない呪術の世界であった。聖天信仰や毘沙門天信仰で大勢の人びとを集める寺院、できものを治す「デンボの神」の神社でお百度をふむ行列、溪流や湧水を用いた滝行場、「ひと助け」をする霊能者を多数擁する修験寺院、シャーマンたちが供養の儀礼を演ずる朝鮮寺（在日コリアン寺院）などなど。要するに、第二次世界大戦後の日本社会の近代化の中で衰退するはずのものが、したたかに生きている！なぜなのか。

こうして生駒の宗教の全貌と現状を調査するという課題が出てきた。われわれがリファアーできる貴重な先行調査があったことは、まことに幸運だった。昭和初期（1930年代前半期）に栗本一夫（のちのペンネームは赤松啓介）氏がほぼ1人で生駒の全域にわたって実施した民間信仰調査がそれである。

宗教社会学の会は1981年春から調査を開始した。生駒全域で約600に及ぶ大中小零細の寺社、宗教施設をことごとく調べるという時間と労力を

要する調査だったが、その結果は『生駒の神々——現代都市の民俗宗教』（創元社、1985年）として刊行できた。昭和初期から戦争と戦後の近代化をはさんで半世紀後、細かい変化はあるものの、生駒の民俗宗教の活動量はほとんど変わらないこと、近代化に対抗して生活世界を防衛再生しようとする営みがそこにはあること、そして日本社会の宗教シーン総体の中では、宗教の差別的分業構造の最下層にあること、などなど。

生駒調査はその後も続き、村田充八・三木英編『民俗宗教の実態——生駒宗教調査』（科研報告書、1997年）をもっていったん終結した。というのも都市自体の宗教現象、都市の中の民衆とコミュニティの宗教行動を重視する必要があること、会のメンバーの世代（コーホートというべきか）交替と若返りが進行していたことが理由だった。「宗教社会学の会」にはつぎつぎに時代の問題にセンシティブな若手が参加してきて、だらだらじりじりとツララが伸びてゆくような仕組みがあって、これが若手の人材育成に役立っている。

「宗教社会学の会」は自由で開放的な研究グループだったから、若い人々がたえず参加してきて、新奇な発想と行動力をもたらした。それによって、この会の保持と革新が滑らかに継続してきた。

共同の企画、共同の調査はこの会の持ち味であり、世話人の三木英氏と若手メンバーたちの尽力で『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』（創元社、2012年）が刊行された。「再訪」によって何が明らかになるだろうか。何が変わらず、何が変わっていくだろうか。

生駒宗教調査の80年、「継続は力なり」という言葉の重みをしみじみ感ずる。